志村 恵「本の中のふたごたち」⑭

ふたごが描・書いた絵本

ふたごの親である作家としてはシェークスピアが大変有名ですが、自分自身がふたごの作家はどのくらいいるのでしょうか？有名なところでは、ドイツ文学のイルゼ・アイヒンガーやアメリカ文学のジョン・バースといった作家たちが思いつきます。絵本作家ではどうでしょうか？日本で一番有名なふたご絵本作家は、疑いもなく田島征彦・田島征三兄弟でしょう。特に、征三さんの作品は映画化されましたし(『絵の中のぼくの村』東　陽一監督)、その上映運動もあったのでご存じの方もいることと思います。

さて、今回ご紹介するのは、ふたごの姉妹が協力してつくった絵本『ふたごのかぽとゆぽ』です。田島兄弟は、それぞれが画家として独自の成長をされ、それぞれが独立したアーティストとしての地歩を固めてから、共同製作の『ふたりはふたご』を作られたのに対し、浦上姉妹は、最初から一緒に一冊の絵本を制作しました。この作品は、「かぽ」と「ゆぽ」という作者の名前を連想させる主人公二人（扉絵に「かぽ」がかおりさん、「ゆぽ」がゆかりさんと分かるように作者名が配置されています）が、「じいじ」と「ばあば」を訪問するその道すがらの物語です。ちなみにうちの娘たちも祖父母を「じいじ」「ばあば」と呼んでいるので、なんとなく近しい感じがします。

「かぽ」と「ゆぽ」は、お父さんとお母さんが焼いた「どんぐりパン」を「ぴこぴこ村」に住むおじいさんとおばあさんに届けることになりました。２人仲良く手をつないで出発したのはよいのですが、途中で地下トンネルを通るかどうかでケンカをしてしまい、別々の道をたどることにします。どうやら「ゆぽ」の方が恐がり屋さん、あるいは慎重派のようです。しかし、別々の道を通っているつもりでも、外から見ると、実はおんなじ道の上と下を歩いているだけなのです。もちろん、それぞれに危険や冒険があるのですが、それでも同じコースの地上と地下なのです。それから、それぞれがたとえば花の茎と根をひっぱってみると、偶然おんなじ花の茎と根だったり、「かぽ」が踏みつけて落としてしまった岩が「ゆぽ」の危機を救ったりと、知らず知らずのうちにも一致したり、助け合ったりするのです。最後には、「かぽ」がカラスに取られてしまった「どんぐりパン」を「ゆぽ」が地下道から必殺技「靴飛ばし」を使って取り返します。慎重派だった「ゆぽ」がここではその積極性と活発さを見せているのですが、子どもの頃、履いている靴を蹴り飛ばして的に当てるこの「靴飛ばし」が得意だった僕としては「う～ん、やられたな」という感じです。こうして、「どんぐりパン」を取り戻した「かぽ」と「ゆぽ」は仲直りして、また手をつないで「じいじ」と「ばあば」の所まで一緒に行きます。かわいいふたごの孫の訪問に大喜びしている祖父母を前にして、二人は「かえりはいっしょにかえろうね」と指切りげんまんします。

「ゆぽ」と「かぽ」は、浦上さん姉妹が僕宛の私信に書いてあるように、「見た目は同じでもどこか微妙な違いがあります」。顔もほんの少し違いますし、表情や身ぶりも違います。それは「文も絵も全て２人で考え描いて」いるのですが、「主人公達は各々が描いて」いるからなのでしょう。親子で一緒にそうした違いを見つけたり、あるいは浦上姉妹がこっそり絵の中に忍び込ませている「遊び」や「クスグリ」を発見するのもきっと楽しいことでしょう。

「ゆぽ」と「かぽ」は、これからもきっと同じことをしたり、違ったことをしたり、一緒に行ったり、別々に行ったりしながら大きく成長していくのだと思います。

浦上かおり・浦上ゆかり『ふたごのかぽとゆぽ』書影　　田島征彦　田島征三『ふたりはふたご』書影

浦上かおり　浦上ゆかり :『ふたごのかぽとゆぽ』ポプラ社。
田島征彦　田島征三 :『ふたりはふたご』くもん出版。
田島征三 :『絵の中のぼくの村』くもん出版。

『ツインズ』39 号（ビネバル出版）から転載・修正